



RIFS通信

NUMBER

32

平成16年12月20日発行

■ 目次

1. 活動内容
2. 『研究所よりの報告』
3. 『現地報告』
「オレゴン州セーレム市の
国際交流とまちづくり」

▼ セーレムにおけるWorld Beat Festivalの風景(矢澤則彦氏撮影、本号所収記事参照)



活動内容

研究交流事業

- ・企業倫理研究会
平成16年10月2日、10月30日
- ・日本交渉学会
平成16年5月11日、6月6日、6月9日、7月16日、8月4日、9月6日、10月20日
- ・中東報告会
平成16年9月15日
- ・日本語教育セミナー
平成16年10月22日、10月29日

研究所よりの報告

国際交流研究所長 金子 勝

RIFS通信をお届けするにあたって、平成16年度における国際交流研究所の活動状況についてご報告させていただきます。

年度事業計画に沿って、以下の諸事業をすでに実施いたしました。

第一は、研究員による自主研究支援事業です。これは、大学院修士課程修了者を対象に、研究者としてのさらなるステップアップを支援する事業です。今年度は12名の研究員の在籍を承認し、別表のとおりテーマに関して、指導教員と協力して研究活動を支援しております。この事業を通じて、これまでに多くの研究者が国内外で育ってきております。

第二は、モンゴルの地域開発に関する共同研究事業です。モンゴル開発研究所(MDRC)と提携してモンゴルの地域開発について研究した成果をウランバートルにおいて開催されたMDRC主催の国際会議の場で報告いたしました。この国際会議は、モンゴルの体制改革にかかわる戦略的課題について、諸外国の研究者がそれぞれの研究成果を持ちよって大統領府をはじめとするモンゴル政府関係者とともに論議する重要な場となっています。国際交流研究所は、かつてモンゴル科学アカデミーの解体にともないMDRCが発足する時点から共同研究事業を継続実施してきております。

第三は、東京国際大学の教員を中心に、内外の研究者が参加している「企業倫理研究会」の活動を支援する事業です。今年度はすでに2回の研究会が開催され、さらに継続中です。なお、この研究会の成果は、「研究シリーズ」として小冊子にとりまとめ刊行される予定です。

金子教育団、(財)昭和経済研究所、東京国際大学の役員・教職員の支援を得て、国際交流研究所は、さらに充実した事業展開を期して多様な事業を実施してゆく所存ですので、関係各位のいっそうのご支援とご協力を切望いたします。

別表：平成16年度研究員ならびに研究テーマ一覧

研究員氏名	研究テーマ
愛 華	交易の原点を考える
宋 修 日	朝鮮半島に対する戦後の日本外交について
金 粉 男	消費者の行動変化が小売業に及ぼす影響について
劉 江	中国年金制度の改革と展望
工藤義教	少年非行から見る家庭の影響－アメリカの視点から－
王 浩	中国自動車企業トップ3社の成長戦略比
李 燦 雨	東北アジア経済協力の基礎条件に関する研究
尹 宣 海	コーポレート・ガバナンスの日韓比較 －エネルギー業界を中心に
金 善 龍	交渉学の革新
陳 子 雷	中国における政府間財政調整機能と制度的形成の研究
王 效 紅	中国の西部大開発－内陸発展戦略の行方
鄭 賢 眞	ユーロがアジア経済に与える影

オレゴン州セーレム市の 国際交流とまちづくり

東京国際大学言語コミュニケーション学部助教授 矢澤 則彦

●はじめに～セーレム市紹介～

アメリカ北西部オレゴン州の州都セーレム (Salem) という町、その名前には、なにか神聖なる響きを感じる。それもそのはず、その語源はヘブライ語で「平和」を意味する「シャローム (Shalom)」から派生した言葉であるが、これは先住民が、このあたりを「チェメケタ (安息の地)」と呼んでいたことによるといわれている。ユニオンパシフィック鉄道に線路を借りて、不採算ながらも、西海岸の鉄道希少路線としてポートランド、ユージン間の緑豊かな原野を走るアムトラックの姿は開拓時代を生き抜いた頑固なロートル気質を髣髴させ、なんとも誇らしげで憎めない豪快さがある。14万都市セーレムは、その人口規模からして日本の地方都市にたとえれば北海道小樽市や鳥取県米子市ということになるが、その整然とした街並みはどうにも日本の中ではたとえようがない。強いていえば、市内の街路すべてを、杜の都仙台の定禅寺通りのように、しかもそれを開放的にしたようなイメージである。筆者はそんな町全体が緑豊かで、まるでハリウッド映画のセットの中にいるようなセーレムの東京国際大学アメリカ校 (TIUA) で派遣教員としての2年間を過ごすことができた。以下はそうしたセーレムに滞在し、国と国の交わり、町と町のそして人と人の交流に関して肌で感じたつれづれなる思いを綴った見聞録である。

●姉妹都市のリレー ～川越、スウェーデンのヴェクショー～

姉妹都市は「Sister city」という表現の他に、「be twinned with」

で「姉妹都市になる」という言い回しがある。つまり姉妹関係になるからにはなにか共通点があるということになる。埼玉県川越市にとっての姉妹都市セーレム市はどうだろう。江戸のそして東京の衛星都市的な存在の川越と、オレゴン州経済の中心地ポートランドへの求心性があるセーレム。外見面、歴史面での共通点はなさそうだが、「川」をキーワードにその接点がありそうだ。セーレムを曲流するウィラメット川はその南ユージン付近からコロンビア川へのおよそ400kmを、そのカスケード山脈の裾野に沿う肥沃な大地を潤し、果実、野菜、その他食料品の加工業が盛んなポートランドを通過し、太平洋側への貿易を担うアストリア (交易都市: Fort Astoria) への流通を支え、物資交易の大動脈の役割を果たしてきた。川越も言わずと知れた、荒川の支流、入間川、新河岸川が將軍のお膝元江戸への食料、材木などの流通を支えた。いずれも内陸に位置し、川や水路を巧みに生かしながら発展してきた都市といえる。

その一方で、緑を湛えるセーレム市は同様に森林の国スウェーデンにあるヴェクショー市と姉妹都市の関係である。ヴェクショーの人口は7万人、セーレムが14万人と、その規模に倍の差があるが、サケがやってくる緑豊かな森の都イメージは、川越とセーレムの関係などよりもさらにぴったりとした共通点が見えてくる。セーレム自体はヴェクショーとは直接関係を持っていないが、実は、セーレムを介して、川越とヴェクショーが兄弟関係ならぬ、「友達の関係」になっていることに気づく。くしくも、東京国際大学は、その両地域でそれぞれウィラメット大学および、ヴェクショー大学と姉妹校関係を結んでいる。Barbyさんという大変学生の面倒見のよい東京国際大学アメリカ校の現地スタッフの一人が積極的にボランティアで活躍している「川越・セーレムの会」と呼ばれる市民団体の活動は大変活発であるが、セーレム市とヴェク

ショーとの交流はあまり活発であるとはいえない。実は、東京国際大からの留学生が毎年その両者の「友情」をつなぎとめる親善大使の役割を果たしているといっても過言ではなく、留学先の授業を通じての国際交流への貢献度は、定期的、事務的に行われる自治体同士の親善訪問では実現し得ないアカデミックで少々ハイブローなレベルであるといえよう。

●万人が愛せるオレゴン色

アメリカに来る以前から、アメリカの絵画はどうしてこうも色彩に「くすみ」がなく鮮やかなのだろーと思ってた。日本の秋の紅葉の「紅」色はどこか茶系統がまざったようなくすみがある。「色の表現手法が違うのだろー」とこれまでそんな疑問に勝手に解釈を与えていた。ところが、である。セーレムから秋口に、22号線を真東へドライブすると、なんと、そのカラフルで鮮やかな透き通ったオレンジ、イエローの紅葉が立体3Dの偏光メガネでもかけたかのように我々の眼に飛び込んでくるのである。パステル色に紅葉した木々が魔法のように出現するのである。とりたてて就業の機会が多い訳でもないオレゴン州セーレムに、ヒスパニック系移民や、ロシア系移民など数多くの人種が定住しようとする理由のひとつにはこんな色彩が豊かで、平和な安堵感を与えてくれる大自然の懷に抱かれる生活に憧れがあるのではないかと納得させられてしまう次第である。大都市にあこがれる人はブランド商品のベネトン色、田舎町にあこがれる人は、天与のブランドのオレゴン色に魅了されるといったところか。

●人種を超える街並みへの誇り

かつてケビンリンチは彼の著書”都市のイメージ”の中でボストンを取り上げ、彼の論理を展開していたが、リンチの言う、どこを切っても、あるいは突然その街のどの部分に迷い込んでも、「その街である」とわかるような、音楽にたとえたら「ジャズ」のような街こそ独自のアイデンティティーのある素敵な街、実は、セーレムもそんな街に近くなっている

のではないかとされる。いまでも州議事堂の尖塔部分より高い建物は建築せず、街の不動点としてその威圧的なまでの風格を持つ白亜の大理石の建造物は、Winter通りの目と鼻の先までせまる住宅地、その一軒一軒の整然とした庭先の青々とした芝生、榆・ケヤキの巨木によって街の風景の中に溶け込んでしまっている。庭先をきれいにさせる意気込みは、いかなる人種・所得階層の家も巻き込んでクリスマスの時期に「街並みの美学」を追求しようと最高潮に達する。正確に言うとセーレム地区ではなくセーレムの北に接するカイザー(Keizer)地区なのだが、“Keizer Christmas Lights”と称する、各家庭の庭先を電飾アートの芸術性・独自性を競い合う祭典がある。街中の人々が、総動員で参加をし、今年の電飾アートはさてさて如何なものかとばかり、周辺住民が車で押し寄せ、地元警察と消防の協力のもとに決められたルートづたいに、徐行運転で「ねり走る」そんな光景は、夜だからこそ、皮肉なまでに皮膚の色による分け隔ての無いイベント、街ぐるみ、^{コラボレーション}地域ぐるみの共同作業となるのだろう。

●オレゴン刑務所の日本庭園 ～日本のセンスを支える中心人物～

戦後、日本からアメリカのセーレムを選び移住したToshiko Lockeさんというナイスレディーは、数十年日本を離れているにもかかわらず、研究熱心で日本人以上に日本人らしさを持つ女性である。日本料理、和菓子を作らせたなら、それこそ、料亭や、和菓子の老舗でさえも出会えそうもない本格的な味を創出する。市内に在住する日本人の老若男女に絶大なる信頼・支持を受けている。大手日本企業SUMCO(住友三菱合併会社のマテリアル系会社Silicon United Manufacturing Corporation)が実質撤退した現在は、セーレム市内の有力日系企業は(株)ヤマサの醤油工場のみになってしまったものの、日本人コミュニティは小規模ながらも永住者の協力のもとに健在で、日系企業に赴任中の日本人主婦たちにとって、また同時に、日本びいきのアメリカ人主婦たちにとっても、Toshikoさんは日本料理の神様の存在となっている。さらに彼女には偉大なるエピソードがいくつもあつた。セーレムは州都

だからか、オレゴン州の刑務所が集まっている。そのような中、囚人たちの情操教育指導、社会復帰指導の一環として、刑務所内の本格的日本庭園の造園を監督指導したのが、彼女なのである。また、盆栽の手入れといえば、オレゴンには彼女しかおらず、ポートランド日本領事公邸に^{よわい}齢79にして繁く足を運ぶ、「日本の古き良きイメージを支え続けてくれる」余人をもって替えがたいボランティアスタッフなのである。

●住宅のエレベーションと人種の万華鏡政策^{カライドスコープ}

別荘でもないのに何故白人系アメリカ人はこんなに不便な高台に住んでいるのだらうと思うことがある。エレベーション(高低さ)が違うと、住み着く人種が違う。眺望の良い小高い場所は、セーレムの中心部からたとえ遠くても地価が高く、「この面積以上購入してください」という最低面積が設定され(ミニマムロットゾーニング)、相応の所得を得ている人しか手が届かないようになっている。日々、自動車通勤をしなければならない都市的生活を考えると、かなり理不尽にみえることもある。セーレムは北海道の択捉島とほぼ同じ緯度にあるが、温暖湿潤気候ゆえほとんど雪もふらず平穏に暮らせる大変過ごしやすい地域である。ところが、稀に、いったん気温が下がると、それこそ路面は凍り、普通自動車では小高い坂を登って自分の家にたどりつくことはできなくなることがある。実は丘の上の在住者たちはそんな「万が一」のためと、オレゴンのワイルドライフを満喫するために、RV車(四輪駆動車)を購入する。RV車でヨット、カヌー、キャンピングカ

ーを、いくら海から遠くても、雨が降ろうが槍がふるうが、丘の上にある自分の家まで牽引するのである。まさに潤沢なガソリンがあってはじめてステイタスを維持できるアメリカ方式である。その一方で、あきらかに、低地、道路沿いのスーパーに近い便利な場所はヒスパニック系、あるいは有色系の人々が住む場所となっている。特にAfrican-Americanの少ないオレゴンではヒスパニックの人々が3Kの仕事を担当の傾向があり、その多くが自動車を普段の足代わりにするのが金銭的に難しい、そんな所得階層になってしまっている。ご存知のように一般にアメリカの都市の衰退は低所得者層が都市中心部に取り残されることにより進む。自治体関係者の話では、こんな状況を打開するために、より低地にコンドミニウム(分譲マンション)、デュプレックス(二世帯家屋)等の集合住宅を建設して、いろいろな人種、所得階層の人々が混在居住することを狙った開発を薦めているという。セーレム市内のインターステイト・ハイウェイ1-5の252番出口から真西に程近い、団地“Woodscape Glen”はログハウス風の間所得者層用の宅地開発、同じく真西に数キロ離れたところにある団地“Copperfield”は安普請ながら清楚なヨーロッパ風風の宅地開発がまさに目抜き通り沿いの低地で進められ、多種の人種混在と小一時間程度でポートランドへ通勤できる地の利を売り物に多様な出勤族の取り込みの狙いがそこにはある。

●ワールド・ビートフェスティバル (World Beat Festival)

6月の最終週の土日はWorld Beat Festivalと呼ばれる国際交流のためのお祭りが開かれる。ウィラメット川の河川敷に広がるリバーフロントパークを会場に、セーレム市内で働く世界各地からの労働者、留学生、あるいはそうした人々を毎年暖かく迎え入れているホストの人々が一丸となって作り上げてゆく、ほのぼのとはしているが大規模な祭典である。万博会場に匹敵するような広い面積の公園を使って、世界の地域に分かれたVillageごとに露店、舞台そして分単位で繰り広げられる民族パフォーマンスで会場一帯を埋め尽くす。毎年の参加団体数はおおよそ100チーム、4~50ヶ国。『完全ではなく



ても“World”レベルにする』、そんな企画が栄えるフェスティバルである。体裁が整わないとフェスティバルではないという臆病な考えが日本でのお祭りにはあるような気がするが、ここにはそんな危惧は全くない。本格的なダンスを披露する国もあれば、生まれ育った母国の記憶を頼りに、見よう見まねで衣装をあつらえ、ぶつけ本番で望むチームもある。かといって、「手作りの祭り」と謙遜しなければならないほどチャチな祭りでもない。このスポンサーは地元の有力銀行等錚々たるメンバーである。日本大使館もブースを持ち日本をアピールする。東京国際大学アメリカ校の学生も異文化研究(Intercultural Study)の授業担当の先生が舵取りをし、学生総動員である。袴を纏いながらの剣道の紹介はまさに観客の目には「侍=Japanese Warrior」のパフォーマンスとうつつ。ギャラリーの子供たちも、ところ狭しとYeah! Yeah!と奇声を発し真似をする。そんな侍の横で女子学生が浴衣をきれば、もはや十二単に身をくるんだお姫様である。どこで誰が釜焼きしたか判別不能の寄せ集めの陶器でお茶会を開けば、そこは京都南禅寺。正座したつもりのにわか茶人の出現だ。剣道同好会が練習試合をすればそこは天下一武道会。観客は忍者かスパイダーマンになったつもりなのか五感のアンテナを最大限張り巡らせ、自分の周囲は平和な御仁しかいないのに、その尖らせた神経で背後に気を配る、そんな気迫を共有しながら出演者と観客が一体となってパフォーマンスを繰り広げる。中でも感心したのが、日本の落語「まんじゅう怖い」を英語で表現するとどのようなストーリーになるのかに挑戦した学生がいたが、その着想はさることながら、彼の度胸には脱帽であった。

● 広く門戸を開く チェメケタ・コミュニティカレッジ

セーレムには、経営が苦しいながらもポートランド同様に大規模なコミュニティカレッジがある。理科系、文科系、運動系等、そのメニューの選択の幅がかなり広いチェメケタ(Chemeketa)・カレッジである。市民の再教育・生涯教育の場であると同時に、外国からの学生の受け入れの入口的役割

も果たしている。正規のクラスで一定の単位を修得すれば、州立大学への編入学も夢ではないので、世界各地からやってくる学生、といってもメキシコ方面からのヒスパニック系の学生、最近ではアジア系に加えてロシア系の学生も多いのだが、将来アメリカで活躍する自分の姿を夢みて、勉学に励む若者たちは、まさに多角的な国際交流の明日を担っているといっても過言ではないだろう。そんなチェメケタ・カレッジでは世界の地域的な理解を深めるテーマ週間があり異文化理解を深めるすばらしい機会を学生や地域住民に提供している。筆者も「アジア週間」と称する2003年の春にアジアとアメリカの交通システムの比較を題材に片言の英語ながら講師を務め、貴重な体験をすることができた。

● おわりに

帰国して数ヶ月を経過した今もなおセーレムの薄れ行く思いをつなぎとめてくれるものがある。USPS(米国郵政公社)が転送してくれる郵便物だ。この制度を知るものは少ないと思われるが、日本から米国への転送サービスはないものの、実は、逆の米国から日本への郵便物の転送サービスは存在している。しかも無料である。帰国間際、まさかと思い郵便局へ立ち寄ったのが良かった。サービスが存在していること自体に驚き、さらに代金無料と聞いて二度びっくりした。アメリカにいたときははなはだ迷惑だったダイレクト・ジャンクメールも、日本に戻ってきた今は、セーレムでの生活を思い出させてくれる楽しみの一つとなっている。人々のモビリティの高いアメリカというお国柄か、国と国を行き来する、まさに国際交流を縁の下から支える頼もしい郵便サービスといえよう。